
黒いサンタと赤い三人娘

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いサンタと赤い三人娘

【Nコード】

N8358I

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

今年も黒いサンタがやってきた！でも今年はちょっと早過ぎるぞ？現れたのは大型ショッピングセンター。黒岩三太郎に目を付けられた三人組のポップグループの運命やいかに！？《黒いサンタ2009》

1 演奏会（前書き）

*三人娘の正体は09'12'01付け活動報告をお読みください。

1 演奏会

ここは3階建てのとても広くて大きいショッピングセンターです。中にはたくさんのお店があつて、レストランや映画館まであります。

今日は11月最後の日曜日です。店内はもうクリスマス飾り付けでいたるところキラキラ輝いています。

広いショッピングセンターの、真ん中に、1階から3階まで吹き抜けの広場がありました。青や赤や黄に色が灯る大きなクリスマスツリーがあつて、その横にイベント用のステージがありました。

今日は音楽のグループがイスに座つたお客さんたちを前に演奏しています。

ヴァイオリンを弾く三人のお姉さんたちです。

お姉さんたちはクリスマスにぴつたりな赤いドレスを着ています。ヴァイオリンという難しい音楽のようですが、お姉さんたちの弾くのはシンセサイザーのリズムに乗せたポップで楽しい曲です。

一曲終わるごとに、イスに座つたお客さんはもちろん、2階3階の手すりから見ている大勢のお客さんが拍手しました。

お姉さんたちは

「ツインクル・ストリングス」

というグループです。

もともとは

「トウエルブ・ストリングス」

といつて、ヴァイオリンの弦は4本ですから3人で12本、英語で12本の弦の意味でこの名前だったので、小さな女の子が間違えて

「ツインクル・ストロー・リング？」

と目をキラキラ輝かせて言ったので、それをとても気に入ってこの名前に変えたのでした。

今日もお父さんお母さんに連れられて小さな女の子たちがニコニ

コ楽しそうに演奏を聴いてくれます。

あんまり楽しいからでしょう、

お姉さんたちが演奏していると、一人の3歳くらいの女の子がステージの前に出てきて、お客さんの方を向いて自分もヴァイオリンを弾く真似を始めました。本人はすっかり本物のヴァイオリニストになりきってとてもまじめなものです。

お姉さんたちはもちろん、お客さんたちもニコニコして小さなヴァイオリニストのパフォーマンスを見ていました。ところが。

女の子には5歳くらいのお兄ちゃんがいました。

このお兄ちゃんは妹がみんなにうけているのを見ると、自分も前に出てきて、妹のとなりで真似してヴァイオリンを弾き出しました。ところがこのお兄ちゃんときたら、うけようと思ってまじめくさった変な顔をして、やたらと大げさな演奏をするものですから、お客さんがクスクス笑い出しました。

お兄ちゃんのお母さんは恥ずかしくてまっ赤になってしまいました。た。

大急ぎで前に来ると、パシンとお兄ちゃんの頭を叩き、席の方へ引つ張っていきました。すると一生懸命演奏していた妹が、自分も怒られたと思つて「わあ〜ん」と泣き出してしまいました。

小さな子供は一度泣き出してしまつとなかなか止まりません。お母さんはまた慌てて前に出てきて女の子の頭を撫でてなぐさめましたが、「うわ〜んうわ〜ん」と女の子の涙は止まりません。けっきよくお母さんは女の子を抱えるようにしてその場を逃げ出し、みんなに頭を下げ謝りながら、

「こらっ、あんたも来なさい！」

とお兄ちゃんを呼んで、広場から逃げていきました。「うわ〜んうわ〜ん」と女の子の声はずつと遠くになるまで聞こえていました。

お姉さんたちもお客さんたちも、おかしいやら、かわいいそうやら、

なんともへんてこりんな雰囲気の演奏会になってしまいました。

2 / 黒い大男

30分の演奏が終わるとクリスマスカードが配られてテーブルでサイン会が開かれました。すっかりファンになったお客さんたちが列に並び、順々にお姉さんたちにサインしてもらって握手してもらいました。

ずつと並んだ列の最後に、黒い大きな岩みたいにごつい男が立っていました。

黒い靴に黒いズボンに黒いコートに顔半分を覆う黒くて固いひげに後ろになでつけた真っ黒な髪の毛をしています。これまたぶつと黒い眉毛をして、定規で引っぱったみたいな目をしています。

男の番になり、男はクリスマスカードを差し出しました。

「お名前は？」

真ん中に座ったリーダーのお姉さんにきかれて男は

「くろいわさんたろうです」

と答えました。

「くろいわさんたろうさんへ」

とマジックで書いて、3人順々にスラスラツとかつこいいサインをしていきました。

「ありがとう」

男は黒ひげの中でニカツと白い歯をのぞかせ、クマみたいに大きな手でお姉さんたちと順々に握手しました。

さてこれでサイン会も終了です。

ところが、男は立ち去らず、お姉さんたちに言いました。

「いやあ、実に素晴らしく楽しい演奏でした。わたしはすっかりファンになってしまいましたよ」

「まあ、そうですね。ありがとうございます」

お姉さんたちも嬉しくてニコニコしました。男はニカツと笑って言いました。

「そうなのです。そこでぜひ演奏のお仕事を頼みたいのですよ」

それは願ってもないことです。リーダーのお姉さんが言いました。「いつ、どこにおうかがいすればいいのでしょうか？」

「今夜、このすぐ近くです」

「今夜ですか？」

急な話でお姉さんたちは顔を見合わせました。男は心配そうにききました、怒ってるようにも見えます。

「ご予約がおりですか？」

「いえ、新幹線で東京に帰るだけですけれど」

お仕事は嬉しいのですけれど、今演奏を終えたばかりですので、できたら今夜のお仕事はキャンセルしたいのが本当のところでした。でも男は、

「ちゃんと帰れるようにしますよ。えーと、ギャラはこんなところ
でいかがでしょうか？」

と、胸ポケットから取り出した電卓を打って出演料を示しました。まあふつ々の金額です。

お姉さんたちがあまり乗り気でないのを怒ったのか、男は脅すような気味の悪い笑顔を作っていました。

「不足ですか？ 申し訳ありませんな、わたくしどもも不景気では
なか大したお金はお支払いできませんのですよ。しかし」

ますます気味悪い笑いを大きくして言います。

「引き受けてくださったら、きつと、素晴らしいプレゼントを差し
上げられると思いますよ？」

男は凄く大きくて怖そうな顔をしているので、お姉さんたちは顔で相談して仕方なく引き受けることにしました。男は嬉しそうに言いました。

「いやありがとうございます。みんなきつと大喜びすることでしょう。うん
うん、今から楽しみだ。うっふっふっふっふ」

男の笑いはとっても不気味で怪しい感じです。お姉さんたちは引き受けてしまっても不安です。

「それでは7時に屋上の駐車場においでください。車を用意しておきます」

今は夕方5時になるうかというところです。男は上機嫌で言いました。

「それまでどうぞ、ショッピングを楽しむなり食事を楽しむなりしてください。では」

ていねいなお辞儀をして男は歩いていきました。

3 赤い人たち

ツインクル・ストリングスのお姉さんたち三人はドレスを着替え、せつかくですからお店を眺めて、食事をすることにしました。

もうクリスマスセールが始まっていて、どこのお店もプレゼント用の商品をたくさん並べて、見ているだけでも楽しい、本当はどれもこれも欲しい物がたくさんあって困ってしまうほどでした。

ところでお店を眺めていると、

『迷子のお知らせです。どこどこよりお越しのまるまるちゃんがお待ちです。お父さまお母さまはお近くのサービスカウンターにお声掛けください』

と、やたらと迷子の案内がアナウンスされます。まあ無理もありません、シヨップिंगセンターはこんなに広くて、こんなにお客さんがいっぱいいて、小さい子供もこんなにたくさんいるのですから、お父さんお母さんとはぐれて迷子になってしまう小さな子供もたくさんいるでしょう。

それにしては・・・

『迷子のお知らせです』

と、5分おきくらいに続けてアナウンスされている気がしますが・・・

それにしても、

もう一つ気になるのが、シヨップिंगセンターを見回すと、やたらとまっ赤な人を見かけます。それも外国人で年輩のお客さんが多いです。上に赤いジャケットやコートを着ているのはふつうにいるでしょうが、下も、ズボンだったりスカートだったり、ブーツや靴まで赤というのは珍しいのじゃないでしょうか？ 上も下も赤なんて、サンタクロースかテレビの変身ヒーローかロックスターくらいのもので。日本人もいます。若い人もちらほら、男性も女性もいます。やっぱり目立っていて、周りのお客さんもじろじろ見ていま

す。

赤い服のお客たちはお店の商品を熱心に見て、特にオモチャ屋さんにはおおぜいいて、子供のオモチャを手にとって熱心に見ています。子供やお孫さんのクリスマスプレゼントを選んでいるのでしょうか？

さてさて、もっとよく観察してみると、

怪しいお客は赤い服のお客ばかりではありません。赤ほど目立ちませんが、真っ黒なお客もいます。ちよつどあの、

黒岩三太郎のような……。

4 迷子たち

黒岩三太郎もショッピングセンターの中を歩いていました。

彼もやつぱりオモチャ屋やゲーム屋や本屋や服屋やお菓子屋など、子供たちが喜んで来そうなところを選んで歩いていきます。そうして、「うわ〜ん、買って買って〜！ 買ってくれなきゃだあ〜っ！」

と、駄々をこねて、床に寝ころんで暴れているような子供を見つけると、実に嬉しそうにニンマリ白い歯を見せました。

そんな駄々をこねるような子にはお父さんお母さんは怒って、呆れ返って、

「おまえみたいな悪い子は知りません！ いつまでもそこでそうしてなさい！」

と、プンプンしながら行ってしまふふりをしました。そうしてしばらく放っておけば心配になって慌てて追いかけてくるだろうと考えての作戦です。

ところが、追いかけてくるはずの子供がいつまでたっても追いかけてきません。

お父さんお母さんの方が慌てて元のところに帰っても、自分たちの子供は見あたりません。

どうしよう、どこに行っちゃったんだろうと心配していると、

ピンポンパンポーン。

『迷子のお知らせです。どこどこよりお越しのまるまるちゃんがお待ちです。お父さまお母さまはお近くのサービスカウンターにお声掛けください』

と、我が子の迷子を知らせるアナウンスが流れるではありませんか！

お父さんお母さんはびっくりして、恥ずかしくて、急いでサービスカウンターを探して駆けつけました。

うちの子が迷子になっていると言つと、受け付けのお姉さんにはつこり笑つて言いました。

「はい。たしかにまるまるちゃんはお預かりしています。迷子センターにいますので、どうぞ迎えに行つてあげてください」

お父さんお母さんは迷子センターの場所をきいて慌てて向かいました。ところで、お姉さんの制服もクリスマス向けなのでしようか、赤い服に白いふわふわの襟を付け、頭にも赤と白の帽子をかぶっていますが……。

迷子センターは3階のちょうど真ん中の広場の吹き抜けの奥に入つたところにありました。

表のカウンターで名前を確認して、ガラスのドアの奥へ案内されました。

青いかべの通路が続きます。子供が心配なお父さんお母さんはずいぶん長い通路だなとやきもきました。

やっと通路が終わつて部屋に出了ました。

滑り台や大きなブロックのあるカラフルで楽しい部屋です。それに大きな動物のぬいぐるみがたくさんあります。

「ヒロキちゃん！」

お父さんお母さんは自分の子供の後ろ姿を見つけてほつとして駆け寄りました。

「こら。もう、心配かけて・・・」

ヒロキくんの顔を見てお父さんもお母さんも「うわー」「きゃー」と悲鳴を上げました。ヒロキくんの顔がぬいぐるみのお猿さんになつていたので。はつと上を見るとまた「うわー」「きゃー」と悲鳴を上げました。青いお空の天井にふわふわ、大きなシャボン玉に入った小さな女の子がいっぱい浮かんでいたからです。

お父さんもお母さんも「う~~~~ん」とうなつて気を失つてしまいました。

黒岩三太郎がのっしのっしとカウンターのお姉さんのところに来

て言いました。

「さて、悪い子ども家族は集まったかな？」

サント姿のお嬢さんにはっこり笑って言いました。

「ええ。もつじゅづぶん」

「そうか」

三太郎は実に悪そうな笑いを浮かべて言いました。

「では準備の本番にかかるか」

5 人さらい

7時になりました。

ツインクル・ストリングスのお姉さん三人はヴァイオリンを持って約束通り屋上の駐車場に来ました。

空はすっかり夜になっていますが、ショッピングセンターは9時までやっているので屋上にもまだ半分くらい車は残っていました。でもその中でもすごく目立つ一台がありました。黒くて、四角くて、縦も横もすごく大きい、外国の車が出口を出てすぐのところ止めてありました。

その前に黒岩三太郎も立っています。こんな車に乗っているなんて、実はすごくお金持ちなのかも知れませんが、やっぱり怖そうです。ああ、きつとこの人はどこかお金持ちのお屋敷の執事さんなのかも知れないわと三人は考えました。

「ではどうぞお乗りください」

後ろのドアが開かれると、中はすごく広くて、座席はふかふかのソファアでした。三人は夢のように思いながら乗り込みました。

三太郎がきました。

「お食事はされましたか？」

「はい」

演奏するのがお屋敷のパーティーだったらすごいごちそうが出るかも知れないわとちよつと残念に思いました。

「それならけつこう」

三太郎は後ろのドアを閉めました。

三人の座ったソファアは小さなテーブルが着いていて、そこにマンガのトナカイの顔の飾り物が置かれていました。豪華な室内にあまり似合わないマンガのトナカイを見ていると、寝ている目が開いて、角が青色に光って、ピアノの「トロイメライ」の曲が流れ出しました。その優しい音楽をきいているうち、トナカイの目がぴかぴ

か光って、それを見ているうち三人の目がとろんとしてきて、お互いの肩に寄りかかりながら眠ってしまいました。

黒いガラス戸の外からのぞいて三太郎は言いました。

「パーティーまでもうしばらく時間があるのでね、しばらく眠って待っていてくれたまえな」

そうして三太郎はまたショッピングセンターの中へ戻っていきました。

暗いところにパツと明るい光が灯って、お父さんお母さんたちはまぶしそうに目をさました。

会議室みたいな殺風景な部屋に30人くらいのお父さんお母さんたちが連れ込まれていました。

「ここはどこなんだ？」

「うちの子はどこにいるんだ？」

不安とあせりにざわざわすると、ドアのところから三太郎が歩いてきて言いました。

「お父さんお母さんしょくん、居残りごくらうさま。

さて、しょくんたちのお父さんはどうしようもない悪い子たちばかりだ。そこで、

この俺が魔法をかけてみんな動物や天使に変えてやった。

ははは、

これで悪い子に手がかからなくなつてよかつただろう？」

お父さんお母さんたちは怒って、子供に会わせると騒ぎました。

「うるつさあ~~~~いつ!!!」

三太郎の大声にみんな震え上がりました。

「おつと失敬。なんだいいじゃないか、あんなわがままな悪い子ども？」

うふふふふ、

あんな悪い子でも返してほしいか？ では俺の言うことを聞け」

三太郎は大きな袋の中から白い服を取り出しました。上と下そろいの、白いサントの服です。帽子もあります。

「それを着ろ。そうしてあるゲームの手伝いをしてもらいたい。しよくんらが頑張つて我々を楽しませてくれたら、お子さんたちをちやあんと元の姿に戻してお返ししよう。よろしいな？」

三太郎はまたまたすごい意地悪に笑いました。

6 夜の演奏会

ツインクル・ストリングスの三人がぼーっと目をさますと、暗い中にちかちかたくさんの光が三角形に並んで青赤黄色に色を変えていました。なんだろうと思うと、それは大きなクリスマスツリーでした。ああなんだ、さっきコンサートをやったステージのとなり立っていたツリーじゃないかと思ひ出すと・・

「ハッピー

「ハッピー・クリスマス・デセンバー！」ー！ー！」

大勢の声言って、パツと明るい灯りがついて、ワアーーツ、と大きな拍手が降ってきました。

三人はびっくりしましたが、そこはやっぱりさつきコンサートをした広場で、吹き抜けの2階と3階の手すりにおおぜいの

サンタクロースたちがいました。

「しよくん、アテンション・プリーズ」

黒い大きな背中、あの怪しい黒岩三太郎がステージに立って両手を上げてサンタクロースたちの注目を求めました。

「世界のサンタクロースしよくん、遠路はるばるお集まりいただきごくろうさん。」

さて今年もいよいよ我々サンタクロースの本番、忙しい12月がやってくる。そこで今夜、

『恒例 今年のクリスマスもガンバロー！会』

を行いたいと思います。今夜は存分に楽しんで、クリスマス本番に向けて忙しい1ヶ月を頑張ってくれたまえ。

司会はわたくし、今年のガンバロー会幹事、日本の黒サンタ、黒

岩三太郎がつとめさせていただきます。どうぞよろしく」

ていねいにおじぎする三太郎にサンタたちの中から

「いよつ、極悪サンタ！」

と声援（？）が飛んで、どつと笑いが起きました。手すりに鈴なりのサンタクロースにはちらほら黒いサンタも混じっていて、どの黒サンタも三太郎みたいに悪そうな顔をしていました。

三太郎はニヤツと笑って、まあまあと手で合図し、

「それではしよくん、今年のスペシャルゲストをご紹介しますよう、美しきヴァイオリン弾きの三人娘、

『ツインクル・ストリングス』
のコンサートだ。

さあ、よろしくどうぞ！」

わあーっ と拍手と歓声がいっぱいに広がり、三人はまだ夢を見ている気分でしたが、三太郎にさあとうながされてステージに上がりました。いつの間にかやらまた赤いドレスのステージ衣装に着替えてヴァイオリンを持っています。

三人はなんだかだまされているような気がしましたが、期待に顔を輝かせているおおぜいのサンタたちを前にしては演奏しないわけにはいきません。三人がヴァイオリンをかまえると、スピーカーからシンセサイザーのリズムが流れてきました。何度も演奏しているお得意の曲ですから三人は自然と弓を弦にすべらせ、それぞれのパートを演奏しました。

演奏が始まると、ステージの後ろからぞろぞろと人間の子供の大きさの動物のぬいぐるみたち、サルやトラやライオンやゾウやクマやカバが現れて、ステージの前で演奏に合わせて愉快なダンスを始めました。

ぬいぐるみたちはありません、羽をばたばた羽ばたかせて小さな女の子の天使たちが現れ、天井近くまで飛んでいくと、半分が缶からハケでペンキをまき散らし、するとそれはゆらゆら揺らめくオーロラの光になりました。もう半分の天使たちは魔法のバト

ンを振ってキラキラ輝く雪を降らせました。

演奏する三人は目の前に広がる夢のような光景にびっくりし、うっとりし、とても気持ちよく演奏しました。

ツインクル・ストリングスのコンサートは6曲30分続き、サンタたちの盛大な拍手にもう1曲クリスマスマスの音楽をアンコール演奏しました。

7 的当てゲーム

大盛況のうちにコンサートは終了しました。三人があいさつしてステージを下がると、司会の黒岩三太郎が上がってきました。

「いやあ素晴らしい演奏をありがとう。どうだったね、しょくん？わたしのセンスもなかなかのものだろう？

さて。

ではこれよりガンバロー会のメインイベントを始めたいと思う。

今年のゲストたちよ、入りたまえ」

広場からは天使とぬいぐるみたちが退場し、かわりに白い服を着た30人のお父さんお母さんサンタたちがおっかなびっくり周りを見上げながら入ってきました。

「ほらほらえんりよしてないで、真ん中に集まりたまえ。よろしいではアシスタントくん」

若いサンタのお姉さんが車に乗ったガスタルクを引っぱってきてつながったホースの先のラツパを集まったパママサンタたちに向け、ぎゅっと握りを握りました。するとラツパからシャボン玉がふくらんできて、それはどんどん大きくなっていった。パママサンタたちを包み込んで、まだまだ大きくなりました。シャボン玉は広場のはばいっぴいになって、すると中のパママサンタたちはどんどん小さくなっていった。半分くらいの大きさになってしまいました。

「よし、そのくらいでいいだろう」

三太郎の合図でお姉さんサンタが握りを放すと、シャボン玉はラツパを離れ、ふわーっと天井に上がっていった。天井に当たるとぼよんと弾んで戻ってきて、床に降りるとまたぼよんと弾んで、天井に向かいました。中にいる白サンタたちはそのたび「ボヨッン」と跳ねて、シャボン玉の中であっちこっちに飛んで、大騒ぎしました。

「さて標的の準備はできた。サンタしょくんの準備はどうかかな？」
三太郎が言うと、なんと、サンタクローズたちは全員大きなオモチャのピストルをかまえました。ボールを発射する先がラッパみたいに広がったピストルです。赤サンタも黒サンタも、みんな楽しそうに意地悪な笑顔を浮かべています。まだ若いサンタから、お爺ちゃんお婆ちゃんサンタまで赤サンタも黒サンタもみんなです。まあっ、オモチャとはいえサンタクローズがピストルをかまえるなんて！
「これまでの対戦成績は989対620で黒サンタチームの圧倒的リードだ。今年はどうかな？ 赤サンタしょくん、せいぜいがんばってくれたまえ。それでは始めるぞおー」

ステージの上に大きな砂時計が運ばれています。

「15分間1本勝負だ。よおーい・・・、始めっ!!!」

砂時計がひっくり返されるとサンタたちはいつせいにシャボン玉の中で跳ねている白サンタたち向かってピストルを撃ちました。ポントと飛び出たのは赤と黒のボールです。ボールは外れると消えてしまいました。白サンタに当たると、パンツと割れてボールの大きさの赤または黒の色を白い服につけました。赤サンタ、黒サンタ、どっちが多くの色をつけられるか競争です。

ところで標的にされた白サンタたちですが、ボールが当たると・・・
「うひゃひゃひゃひゃ、うわっ、なんだこりゃ、かかかか、かゆ、かゆい！ ううう、か、かゆくてたまら〜んっ!!!」

そう、ボールが当たっても痛くないかわりに、もうれっにかゆいのです。当たれば当たるほど、

「ひ〜〜、かかか、かゆい〜〜っ!!!」

と、もうどんどんどんかゆくなっていくのです。うーん、これはたまりません。見るだけでこっちもかゆくなってきました。

白サンタたちはこれはたまったものじゃないとシャボン玉の中をボールをよけて必死に逃げ回りました。赤サンタ黒サンタは大喜びで上に下にばよんばよん弾むシャボンの中の的をねらいうちました。ああ、子どもたちのアイドル、サンタクローズが、なんてことだし

よう！

見るに見かねて天使の女の子が一人自分のお父さんお母さんを助けるためにシャボン玉の中に飛び込みました。ほら、あのステージの前でヴァイオリンを弾いていた子です。女の子にはボールが当たってもはじけるだけで何もおきません。でもシャボン玉は上に下に弾んで、白サンタたちはボールをよけて大騒ぎなので、とても自分のお父さんお母さんを守りきることはできません。でも、他の天使たちも、動物のぬいぐるみたちも、応援するためシャボン玉の中に飛び込みました。

天使の女の子が発見しました、バトンやハケでうまくボールを打つと、ボールは発射したサンタクロースのところに戻っていくのです！ しかもボールがぶつかったサンタクロースは

「うひゃひゃひゃひゃあ、これはたまらん！」

やっぱり白サンタたちと同じようにかゆくて大騒ぎするのです。

これを見て天使と動物はよおしく思いました。動物たちもパンチとキックでボールを打ち返せるのです！

赤と黒のボールが飛び交い、もう大混戦です。

8 勝負のゆくえ

そのうちステージの上の砂時計がもうすぐ落ちきるうとしました。子どもたちがもう少しがんばればお父さんお母さんを守りきれますところが、

「おやあ〜〜?」

三太郎が意地悪な目を見ると、あと少しというところで砂が詰まって落ちてこなくなりました。

それを見ていたツインクル・ストリングスのお姉さんたちは三太郎に抗議しました。

「もう15分たったじゃないの?」

しかし三太郎はまるで口笛を吹くように、

「今は魔法の時間で、動いている時計はこの砂時計一つだけなのでね、これが落ちきるまでは15分はたたないのだよ」

と意地悪を言いました。

あと少しがんばればと思っていた子どもたちはがっかりして疲れてしまいました。

「もうっ、見てられないわ!」

お姉さんたち三人が飛び出すと、背中に天使の翼がはえ、ふわりと飛び上がりました。シャボン玉の中に飛び込みましたが、大切なヴァイオリンをバトンやハケのように振り回すわけにはいきませんすると三太郎がピイツと指笛を吹き、ヴァイオリンをかまえて演奏する真似をしました。お姉さんたちはそうかと思つてヴァイオリンを弾きました。するとヴァイオリンを向けた方向に音のバリアができて、ボールはくるりとカーブすると元来た方へ戻っていききました。「さあみんな、もう少しがんばりましょう!」

大きい天使のお姉さんの味方ができて、子どもたちもよーしと、赤サント黒サントを全員やつつけてやるつもりでがんばりました。

「面白くなつたじゃないか」

ニヤニヤ笑っている三太郎の後ろで、お姉さんサンタが砂時計のガラスをピンと指で弾きました。すると詰まっていた砂がこぼれ落ち、さらさらさらと、とうとう最後の一粒までみんな落ちてしまいました。

三太郎はしようがなく宣言しました。

「そこまでーっ！ 試合終了ー！」

ほー、と広場中からため息がこぼれました。試合が終わるとボールの当たったサンタたちはみんなかゆいのが消えていました。実は最後の方はみんな夢中になって、かゆさなんてすっかり忘れていました。

「さーてさて、今年の判定はむずかしいぞ・・・」

三太郎はシャボン玉が割れて元の大きさに戻った白サンタたちの服の赤と黒の色の付き具合を子細顔で調べ、結果を発表しました。

「なんと今年は伝統の赤黒雪合戦始まって以来の珍事だ！ 今年の優勝は、なんと、白サンタチームだ！」

ワーっ、と拍手が響き、「おめでとー！」とサンタたちから声がかけられました。赤黒水玉模様の白サンタたちと天使たちぬいぐるみたちは手を取り合って喜びました。もちろんヴァイオリンの三人のお姉さんたちも。

それにしても、もともとはただの雪合戦だったのですね。今年はこのあくたれ三太郎が幹事だったからこんな乱暴なゲームにアレンジされてしまったのですね。まったく、黒いサンタクロスなんてるくなものじゃありません。

三太郎が両手を上げて注目を集めました。

「それでは会のシメはこの方をお願いしよう。我らが北極のサンタクロスだ」

パチパチパチと拍手がなり、天井から大きな白いスクリーンが下りてきました。

スクリーンにパツと暖炉の前でイスに深々とすわった白ひげのずいぶんお年を召したおじいさんと、そのうしろに立つやっぱり白髪

のおばあさんが映りました。二人とももちろん赤いサンタの服を着ています。

『今年も盛況だったねえ。ほっほっほっほっ』

豊かな白いひげの中で愉快そうに笑うこの笑い方は、まさしくあのサンタクロースです！

『ちとやりすぎのところもあつたがねえ』

三太郎を見ると、三太郎は頭をかいて「うふふ」と笑いました。

『世界中のサンタクロースたちよ。今年もがんばって良いクリスマスになるお手伝いをしよう。少し早いが、メリー・クリスマス！』

メリー・クリスマス！！

サンタたちは全員、黒いサンタもみんな、とても嬉しそうな笑顔で答えました。

スクリーンのサンタクロースはおばあさんといっしょに手を振ってスクリーンから消えました。

ああ、本物のサンタクロースだったんだ・・と、白いサンタたちも子どもたちも、お姉さんたちも、あんまり感激しすぎてぼーっと見ているしかありませんでした。

三太郎が宣言しました。

「今年のガンバロー！会はこれにて閉会だ。サンタしょくん！クリスマス本番目指して、

ガンバロー！

エイエイ、」

「「「「「オーーーーーーッ！！」「」「」

9 プレゼント

パンツと、いつせいに灯りが消えて、真っ暗になりました。
やがてクリスマスツリーだけついて、

向こうから懐中電灯の明かりが近づいてきて、そこに立ち尽くす人々を照らしました。

「やっつ、みなさん！ どうしたのです!？」
見回りの警備員さんです。

周りで夜のオレンジ色の灯りがつきました。

「あつ」

みんなお互いの姿を見て声を上げました。

「戻ってる!」

そうです、子どもたちは約束どおりみんな天使や動物のぬいぐるみから元どおりの子どもに戻っていました。親子は抱き合い、手を取り合って喜びました。

大喜びする親子たちを見て警備員さんは困って言いました。

「みなさん、とっくにお店は閉まっていますよ？ さあさあ、早くおうちに帰ってください!」

親子たちは警備員に追い立てられて出口に向かいましたが、一つだけ、変わったところがありました。お父さんお母さんたちはみんな赤いサンタの帽子をかぶっていました。これが雪合戦に勝った優勝賞品なのか、ただの参加賞なのか分かりませんが、本物のサンタクロースを見られたのですから文句もないでしょう。

「さあさあ、あなたたちも」

ツインクル・ストリングスの三人も屋上の出口に追い立てられていきました。時計を見るともう10時を過ぎていて、東京へ帰る新幹線にはもう間に合いません。三人はとっても困りましたが、一つ嬉しいのは、三人にはサンタの帽子だけでなく、赤いマントもプレゼントされていました。

「ではお気をつけて」

屋上へ放り出されるとドアを閉められ、鍵をかけられてしまいました。

けれどそこに、

あの大きな黒塗りの外国車と、黒岩三太郎が待っていました。

「今夜は本当にありがとう。では、ちよつと約束とは違うが、これでお送りしよう」

三太郎がリモコンキーのスイッチを押すと、
ウイーン、ガチャンガチャン。

なんと車が変形して、オープンルーフの飛行機に変身しました。

「黒サンタに空飛ぶソリは支給されないんでな、これでごまんしてくれ。さあ乗ってくれ」

三人が乗ると、三太郎は前の運転席に座り、

「ブラックトナカイ号、出発進行！」

ゴオツとジェットエンジンで浮き上がり、ビュン！、と夜空へ飛び出しました。

星の綺麗な冬の空です。

ちよつと寒いですがまるでまた夢のようです。

三人の並んですわる後ろの座席の前に、あのトナカイのオモチャがまた怪しく光ってトロイメライを流しています。

空の旅を楽しんで、

翌朝目覚めると三人はそれぞれ自分のベッドの上に寝ていました。
やっぱり夢だったのでしょうか？

でも布団の上にちゃあんとサンタの帽子とマントがかけられています。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8358i/>

黒いサンタと赤い三人娘

2010年10月8日15時26分発行